『 教員の養成 』

教壇に立つまでに、「どんなことを学び、どういう訓練（or 体験）を積んでくるのか」について私なりに触れておきたいと思います。教員として学校で働くためには、まずは教員免許状が必要であり、次に教員採用試験に合格しなければなりません。今回は、教員免許状の取得に関連して、思うところを述べます。

教員免許状は、教育職員免許法の規定に基づき、教員免許状の授与に必要な科目で編成された「教職課程」が設けられている大学で学び、必要な単位を修得できれば取得できます。医師や弁護士などのような国の資格試験はありません。では、「教職課程」とは、どのような内容なのか。私も、1970年代後半に経験していますので、まずは、当時の状況に触れます。40年以上前のことですので、かなりおぼろげな記憶になりますが、雰囲気ぐらいは伝わるかと思います。

正確な名称ではないかもしれませんが、教科に関する科目、教職に関する科目、一般教育的な科目で構成されていたと思います。「日本国憲法」「化学」「英語（第1外国語）」「ドイツ語（第2外国語）」などは一般教育的な科目、「教育心理」「教育工学」「教育実習」などは教職に関する科目だったような記憶があります。教科に関する科目ですが、私は、小学校教員養成課程でしたので、全教科一通りの講義があったと思います。

これまで、何度か書きましたように、私は第3志望（小学校理類：数学、理科、技術家庭）での合格でした。入学後の最初の選択は、専門教科を決めることでした。このことに悩むことはありませんでした。消去法で、「理科」でした。数学や技術家庭では、おそらく卒業は厳しいと考えました。決して「理科」が、得意なわけでも好きなわけでもありません。「理科なら、何とかなるだろう」というレベルで選択しました。専門教科が決まると、その教科の中学校教諭の免許をどうするかを決めることとなりますが、小学校教員養成課程の学生全員が取得を目指していたと思います。私は、とりわけ中学校で理科を教えたいとは微塵も思っていませんでしたが、「就職に有利かな」程度の気持ちから選択しました。

実際に授業が始まって気づいたことは、「中学校理科」で合格した学生と、同じ内容の授業であったということです。私にとっては、極めて専門的な内容でして、「よくわからん・・・」の連続でした。その中でも、わりと鮮明に覚えていることとして、ガスバーナーを使ってのガラス管の加工（ピペットやL字管など）や液体中の正体不明の物質（5種）を特定する実験、点描によるスケッチなどがあります。

3年生からは、卒論に向けてのコースを「物理・化学・地学・生物」から選択しなければならず、この時は、「生物しかない」ということだったのですが、何とかうまく収まりました。最後の関門は、どの教授の指導を受けるかということでした。“植物研、ハチ研、メダカ研、海藻研”（これらは、学生間での通称です）がありましたが、私は「植物研しかない。頼む！」と、何とか周囲の理解を得ることができました。

3年生からの研究室（生物）生活で、印象強いのが、植物・動物組織の永久プレパラート作製。例えば、茎や葉の断面やメダカの脳やラットの腎臓・肝臓の断面を試料にします。作製過程ですが、まずは試料の脱水処理。次に溶けたパラフィンに入れてから冷ます。固体のパラフィン内に固定されている試料を極薄に切断（マイクロ単位です）。切断された試料をスライドグラスに乗せて固定（添着）。スライドグラスに添着された試料のパラフィンを薬剤で除去。染色、水洗、脱水し、染色された試料に封入剤をたらした後カバーグラスをかぶせて乾燥したら完成。以上、か

なりざっくりとした説明をしましたが、繊細さと高い集中力を求められる作業(私には不向き・・・)でした。また、まとまった時間が必要なことと、各過程の時間管理を厳密に行わなければならないので、だいたいは金曜日の夕方から始め、終わるのは翌朝でした。

作った永久プレパラート自体も評価されましたが、レポートにするためには、試料の顕微鏡写真及び試料のスケッチ(点描)が必要でした。ですから、生物学教室の学生は皆、一眼レフのカメラを買いました。また、顕微鏡とカメラを接続する特殊なアダプターも必要でした。いい写真を撮るためには、良質な(均等に極薄であること。染色状況が良いこと)プレパラートが必要になります。暗室で、フィルムの現像や印画紙への焼き付けもやりました。

卒論のテーマは「ギョウジャニンニクの核型分析」。植物の種の同定(種名の決定)は、一般的には、植物図鑑により外形上の特徴から行いますが、細胞核内の染色体の特徴から種の同定をアプローチするやり方が「核型分析」です(私の押さえです)。例えば、「イタドリ」という植物は、北海道で見られるものは「オオイタドリ」と呼ばれ「オオ」がつきます。葉の付け根の切れ込みが深いのです。ですから、染色体の特徴にも何らかの違いがあるものと思われます(記憶による推測ですが)。

教授から、「道南の3地点からギョウジャニンニクを採取し、核型分析を行い考察しなさい」との指示を受けました。晩秋の大沼湖畔などを巡り、越冬前のギョウジャニンニクを探し採取(この時季の根が、細胞分裂が盛んで、染色体の観察に適しているからだそうです)。根の先端を下処理し、「押しつぶし法」でプレパラートを作製し染色体を撮影。写真から、32本の染色体を整理。形状等を比較し考察しました。

さて、長々と私の学生時代の様子を書きました。何を言いたいのか？

当時の「教職課程」は(私が通った大学ですが)、学校現場での教員の仕事に、実践的に寄与する内容が薄かったと思っています(6週間の教育実習を除いて)。上述の、「理科」に関わる内容も、「実験・観察の基本」や「科学の方法」、「学問への姿勢」という点では勉強になったなとは思っていますが、教員の仕事にはあまり役立っていなかったなと思っています。言い換えると、学校現場で即戦力として通用する状態で新卒者は赴任するわけではないということです。ですが、現実には、「今日から、あなたも教員です」と、「ベテラン同等の」とまでは言いませんが、専門職としてかなり高いレベルでの仕事ぶりを求められます。

現在の「教職課程」は(法改正:平成28年11月、平成31年4月より新課程開始)、学校現場の状況の変化や教育を巡る環境の変化にかなり対応した内容になっています。具体的な授業場面を想定した授業づくり(学習指導案作成や模擬授業の実施とその振り返り)や、生徒指導・教育相談の理論や方法や、総合的な学習の時間の指導法など。今日の学校教育で行われていることの基本に触れられていますし、実践的な指導力の育成にもつながるであろうと思われるので、私の時代とは隔世の感があります。ただ、「保護者対応」はないようです。学級担任になりましたら、早々に保護者との対応に迫られます。新卒者にとっては全くの無防備と言っている状態です。また、同僚との人間関係も不安材料になります。せめて、「より良いコミュニケーションの在り方」のような科目があってもいいのではと思っていますが、ないものねだりでしょうか？

最後に、新卒者が赴任した場合、とりわけ管理職やミドルリーダーの方は、丁寧な指導・助言をして欲しいと思います。少なくとも、出だしの4か月は、先回りしていいので、保護者と接する機会や何らかの対応が求められる場面を具体的に想定させ、その時どうするかをまずは考えさせ、それに対して助言し、やらせてみてから振り返らせる。加えて、子ども間のトラブルへの対応も、事実関係の整理の仕方やその後の指導の具体や保護者への対応についても、噛んで含めるくらいの丁寧さがあっていいと思っています。新人教員を育てる上で、この営みがとても大事だと考えます。